

北條民雄文学賞受賞作品



「北條民雄様へ」(ノンフィクション)

作者 森 水菜 (熊本県阿蘇市)  
23歳 会社員

(概要) 作者から北條民雄へ宛てた手紙という形式で、自身の病気や障がいがあること、ハンセン病についての思いをつづっています。

優秀賞



「うら傷」(小説)

作者 原 久人 (本名 岩沢潤一郎) (宮城県東松島市) 70歳 無職

(概要) 高校2年生の主人公は、左足の踵の傷のせいで、学校で「ハンセン病」にかかったとうわさされ、あからさまに級友たちから避けられるようになります。自分が差別されたことで、さまざまな差別を減らす役に立ちたいと思うようになり、進路を決めます。

優秀賞



「流されて」(小説)

作者 太田貴子 (香川県高松市) 41歳 会社員

(概要) 妊娠中の主人公は、夫とその友人とともにハンセン病の療養所である「大島青松園」を訪れました。ハンセン病の患者は、かつて結婚するには男性は断種が義務とされ、妊娠した女性患者は墮胎させられていたという事実に驚愕し、お腹の子に、「元気に生まれてくれさえすればいい」と願います。

特別賞



「月を目の前に見てすすめ」(小説)

作者 加藤尚子 (栃木県大田原市) 53歳 大学教員

(概要) 主人公は医療福祉専門職の養成校で勤務しています。ある学生に、昔ハンセン病の療養所で働いていたというシスターが入所している特別養護老人ホームに同行してほしいと頼まれます。主人公は、その学生とともにシスターをたびたび訪ねるうち、ハンセン病に対する差別の歴史の中で、一般にはあまり知られていない話を聞くこととなります。

今後の予定 (詳細は「広報あなん」1月号に掲載します。)

場所 夢ホール(文化会館)

平成29年1月28日(土) 12:30~開会「第27回阿南市生涯学習推進大会」

第1部「北條民雄文学賞授賞式」「受賞者と選考委員による対談」  
第2部は、「神田川」「からたちの小径」などヒット曲の作詞家の喜多條 忠さんによる講演と、生涯学習活動の発表があります。

平成29年1月29日(日) 映画「あん」の上映 (①10:30~②14:00~の2回上映 ※無料ですが、平成29年1月6日(金)から入場整理券を配布予定です。)

ハンセン病の元患者の徳江(樹木希林)と、どら焼き屋の雇われ店長の千太郎(永瀬正敏)、常連客の中学生ワカナ(内田伽羅)との交わりを描いた作品。徳江の作った粒あんはあまりにもおいしく、店は繁盛しますが、やがて心ない噂が、彼らの運命を大きく変えていきます。



北條 民雄肖像画 (日本近代文学館蔵)

北條民雄文学賞は、阿南市出身の作家北條民雄の生誕100周年と阿南市合併10周年を記念して、平成27年度に創設されました。  
作品募集期間は、平成27年8月3日から平成28年2月29日までで、全国から65編の応募がありました。

5月25日に県内で推薦委員会を開催し、最終候補作品を8編にしぼり、7月27日に東京都で選考委員の原田大二郎さん(俳優)、高山文彦さん(作家)、旺季志ずかさん(脚本家)による選考委員会において慎重に審議された結果、大賞1編、優秀賞2編を決定しました。また、選考委員会当日に選考委員からの申し出により、特別賞を新設し、1編を決定しました。  
なお、北條民雄文学賞は今回限りとなっています。受賞作品は、左記の通りです。

北條民雄

1914(大正3)年~1937(昭和12)年

川端康成をして「彼が生きていたならば、私より先にノーベル文学賞を受賞していただろう」と言わしめた阿南市出身の天才作家です。

19歳の時、ハンセン病と診断され、全生病院(現在は、国立療養所多磨全生園)(東京都東村山市)に入院しました。その入院中に文学に打ち込み、川端康成の手を借りて発表された「いのちの初夜」が、第2回文学界賞を受賞、ベストセラーとなりました。

その後、短期間のうちに作品を発表し続けましたが、23歳の若さで退院することなく、全生病院で亡くなりました。